

起 爆

NO. 2

- なし崩しファシズム—侵略—反
革命戦争との闘いを世界革命
戦争へ！
- 世界同時革命！
- 世界党—世界赤軍—世界革命戦
線を創出せよ！

共産主義者同盟 赤軍派

50YEN

もくじ

序	-----	2
単一の世界革命戦争の計画された戦略=各国前段階蜂起- 国際根拠地-世界赤軍創設へ	-----	3
軍隊建設-敵軍隊解体斗争	-----	4
世界党=国際根拠地=蜂起の軍隊と結合し、革命的党派 斗争を推進し、革命戦線(準)を結成せよ!	-----	7
世界情勢とフロントとの党派斗争の危地	-----	16
プロレタリア人民の軍隊-中央軍-地方軍-ゲリラ軍を 建設せよ、革命戦線を建設せよ	-----	20

ける未成熟な主張を、七月十八日の閣議で、整理、体系

化し、綱領確立の爲の運動と、前段階蜂起の準備過程に入つたのである。(赤軍N4参照) 自然成長的半蜂起状況を形成しつつもいづれの党派に於いても、その自然成長性を領導しえぬまま敗北した10/21は、既にその時十一日の敗北を予告していたのである。既に权力による計画された攻撃が、政治的、軍事的場面的領域に於いて貫徹されておき、全党派が訪米前段の权力との攻防戦(政治・組織・軍事)に於いて敗北していたのである。その時兵に於いては、我が党の前段階武装蜂起が如何に

て實現されるかという一占に攻防の焦點がしぼられていたのである。

9/5日比谷集會に結集した全ての革命的労働者、學生が、そのことを察知していたのであり、それ以後、我々党への期待と注視の過程が形成されていったのである。

既に階級斗争の、その時点に於ける重み、攻防の質が、武装蜂起によつてしな突破しえないことが、白日の下に明るみにされつつある時、六條ハ條外田英哉「国利

現実の運動組織の構造として、如何に獲得し得るかを解明し、具体化することなしに前段階蜂起と此自身の革命的意志統一すらなし得ない事態を生まれていつたのである。前段階蜂起は、世界革命戦争を開始する一因的視座を把握せらるる環ではなくて明確に、過渡期世界に於ける階級危機の成熟段階の解明に基づいて確定される世界革命戦争の全方ランの有机的一環として描定されるものでなければならぬということであり、我々が、前段階蜂起に踏み切つたのは、日米根拠地問題を直接の基軸として、

いふのは、同是の三船舶に、貨物と軍に、莫託をもつて向
わけてくる全過程を乗り切つてを強要し、政治的動搖

××××××××××××××るや否や直ちに永續性の
限界乃至、不可避に解体し、敗北を結果するのである。
そして我々にとつて問題はその様に整理され回答が与え
られてきたのである。世界連年戦争の即自的で未成熟な
段階を、国際根拠地を獲得し、世界赤軍へ自ら交戦場へ

各口支部を建設し、国際根拠地と結合した各口武装蜂起の軍隊の建設、敵軍隊の解体を實現することによって「オ三の道派」に於ける「国際分派」を開始することである。

あり、かくして理念や一般性の世界から地上の世界革命戦争への防禦、対峙—攻勢への展開の現在の位置を世界革命戦争の防禦から対峙へと飛躍せしめることにある。世界革命戦争の即時的で未成熟で、非均質な発展の現象を、各口前段階蜂起の計画された展開によって質的差異を統合し止揚し、世界革命戦争を対峙の段階に転化せしめ、遂には「前哨者国家」をも内に含みつつ、中口、ソ連内部にも我々の支部を建設し、最終的攻勢を準備しなければならぬのである。

世界革命戦争への防禦—対峙—攻勢への発展過程で世界革命戦争の「国際根拠地」を拡大していくこと。各口前段階武装蜂起を、国際的軍事勢力によつてしか、継続性は維持されないものである。世界革命戦争と切り離された内戦主義—恒常的武装斗争を唱える「ランド」中央—国際派こそ、現代の「ピエロ」であり、史上最大の

空文主義者であることを彼らにわからせてやらねばならない。

我々党が「国際根拠地」を獲得し、世界の赤軍派としてばこそその日は、極めて近い将来のものとなるであろう。我々は世界の各口への重兵配置によって、党に要求された無量の課題を解決するだろう。

「国際根拠地と結合し、各口に蜂起の軍隊建設—敵軍隊解体運動を組織せよ—」

へ革命の軍隊—建設の総括にとつて根本的な問題は、軍に現われる自然発生性と如何に闘い、それらの問題を整理し、軍隊の性格を如何に確定するかににかかっている。

軍に現われる自然発生性は、オ—に彼らが大量運動から分離されて孤立して存在するために日常不断に形成される戦役主義であり、そしてそれは、その自己中鎖性で結合してテロ集団化されていく傾向と、そして又、「プロ」の矛盾主義と結合して大衆主義へ流れる傾向に分解する。そして戦役主義は実態的には、ヒットエンドランが

式のゲリラへついで落する。そしてオ二は、マント中央

派「G」や、大月我々の「RG」の如く、党の「ゲバルト」装置—傭兵に力り下がり、カ「レタリ」の所級形成の最高の表現たる赤軍の自己存在根拠を喪失し解体することである。そしてオ三には、ブルジョア社会の原基的胎

現としての個人主義である。かかる軍の自然発生性を止揚し、すでに確認してきた、単一の世界革命戦争を防禦から対峙へと飛躍させ計画された各口前段階蜂起として確定された政治路線を實現する軍隊は、人民戦争型軍隊や蜂起抜きで革命戦争型軍隊ではなく、嚴格に武装蜂起の軍隊として自らを規定することによつて自らを、世界赤軍にまで成長することが明かにされるのである。

何故へ武装蜂起の軍隊でなければならぬのか。その根拠は以下である。①大衆運動の延長に於ける軍事斗争は、1917/18以降、昨年4/28の党派の軍団による軍事的斗争—大衆斗争が充分成熟し如何なる斗争も軍事的斗争としてしか推進し得ない時代に

突入していること。②仏5月革命、米BPPの運動は、自然発生的であり、前段階蜂起を成熟させていること。

③従つて全ては蜂起に集約されることをもつてしか大衆との結合はあり得ないことであり、ヒットエンドラン式の戦争路線によつては決定的結合は獲得され得ないことである。そしてオ三東やボーゲンザツが展開する

ゲリラ戦と遊ゲキ戦と武装宣伝隊と正規軍と正規軍という建軍の「史的」形成の解明は、何よりも、彼らの人民戦争路線の組織論的産物であり、我々の世界同時革命戦略からするならば、自然成長的建軍では決してあり得ないのである。ブンド中央派の「中央軍力」や「マッセンストロージエ」M・二重軍力から一瞬の武装蜂起に代表される如く、総じて旧新左翼ハ派がカクガタの現代カウツキー主義者が、如何に革命の軍隊・党の革命主義張しようとも、即時的ソビエトM・戦争の延長に革命を志しているに過ぎないものである。そして諸々の軍が、せいぜい「ソビエトM」の失態に立つ「軍」でしかあり

得ず、反革命前段階解体工作によって、ひとたまりもなくアツとばされてしまつてしまつた。過渡期世界にあっては、口際根拠地と結合された全世界をおかつ計画されたオニ、オニの前段階蜂起が、大衆の敵権力解体・政治危機待望の自然成長性と結合し得、維持され、世界革命戦争は、攻勢の段階に入ることまできるのである。

世界革命戦争の過程に於いては、一回に於ける権力奪取も実現し得ない過渡期世界の革命は不可避的に権力対峙として旧来から過渡期に於いて提起されていくソビエトMの問題を、世界革命戦争勝利・各口前段階蜂起貫徹のための軍をもった政治、軍事組織として確立されない限り、武装なきソビエトに転落してしまつたのである。世界革命戦争の時代に於いては、蜂起の軍隊による前段階蜂起と国際的軍事勢力による世界革命戦争の対峙から攻勢への飛躍によって始めて、権力対峙の形成、成熟は実現されるのである。即ち、即自的ソビエトMの延長に権力対峙が形成されるのである。

世界党・国際根拠地・蜂起の軍隊と結合し、革命的党派斗争を推進し、革命戦線をつくりだす。

マント連合派の最後のおかしな例である。

彼らの総力戦をもつて決せられるべき同志社黨連合でも、権力の介入を招き、35名の戦士を死なせただけである。彼らの「革命の軍隊」は、首都へと進軍した。彼らによって、残るは自衛の道のみである。

一方、我々はこの間の「党派斗争」の総括をもつて次への党派斗争―党派解体斗争への教訓化を行つておかなければならない。何故なら党派の望まぬままにウシ由共々相手にしての〇〇名名の革命的同志を権力の弾圧の手に奪われたのだらう。勿論、今更、敵権力の弾圧の買収を並べたててもはじまらない。又、そうだからとなつて、マント連合派の一潮流にまで現われ

く、世界的政治軍事組織に世界へ党一軍一革命戦線による前段階蜂起と世界革命戦争の実態的推進によって、ミブロック過渡期世界の解体と口の世界武装と口への成熟による権力対峙の形成されるのである。従つて蜂起の軍隊建設―敵軍隊解体M―世界革命戦争勝利の世界革命の建設を決定的メルクマールとして始めて世界を担う世界武装とロレタリヤートの権力対峙は創成されるのである。

我が赤軍隊による帝国主義軍隊の叛乱は既に開始された。航空自衛隊佐渡分隊基地に所属する小西三善は、我々赤軍隊×メ地区委員会の下今更、法政大学通信教育部スクーリング期間中に赤ヘルメットに組織され、蜂起を真剣に討議し、赤軍の建設を語り合つた同志である。彼の叛乱は偶然のものではない。

若年革命戦線と連合は、敵軍隊内部に潜入し、叛乱を組織し、帝国主義軍隊を内と外から解体しなければならぬ。

これらのように、敵権力の弾圧下での党派解体斗争の否定―権力の弾圧を其倒れさせるような当面統一して権力へを主張するものは最も墮落であり、反動的である。

蜂起へ向け、党派斗争―党派解体斗争は不可避であり、弾圧、押し進められなければならない。向ひつ、向ひつていて党派斗争も、蜂起―権力問題は革命の根本的問題である。それによつて、その党派斗争―党派解体斗争は根柢的なきで党派の存亡を問ふところまでには押し進められなければならない。それ故、軍事斗争―軍事前対決は不可避である。絶対に日和つてはならない。

だが当然の事として、その軍事的前党派斗争―軍事前対決は、各々の党派の武装と権力のそれを圧倒し、押し進められなければならない。何故なら、何れも党派斗争と武装斗争とを兼ねて展開するから、それへの介入としてあるのではなくて、互代でも党派斗争と武装斗争とを兼ねて展開するから、それへの介入としてあるのではなくて、互代でも党派斗争と武装斗争とを兼ねて展開するから、それへの介入としてある。

即ち、蜂起への時代とは、これ迄の権力―大衆という関係

係から権力―党との政治の段階に突入したことを意味するものであり、又、この關係を成立してこそ計画としての戦術も成立するものである。そして故、蜂起の機

の斗争とは、まず、党の武装として開始されるのである。この時の武装の不可欠の環境としてある党派斗争―

党派解体斗争に権力を介入するのは当然なのである。

大い變なるもの、これだけの党派斗争は権力―大衆に

如何に党派を介するのみをめぐつてのそれであるから

る。

この党派斗争の結果として登場する大衆斗争を弾圧すれば、決定したのであり、現在が蜂起への時代であり、蜂起の機は、党の武装は世界党―口頭根拠地―蜂起の軍隊―口頭地下組織の過程としてあり

だが、前段階武装蜂起は世界革命戦争に向けずの党派斗争は、その称は一般性以上のものと強烈な党派斗争として展開されるのである。何故なら、前段階武装蜂起は世界革命戦争に貫徹されるから、個別なロレタリア人民の利害は勿論の事、一回はロレタリア人民の利害とは、全く一致したものであるから、世界武装はロレタリアの利害に立脚してのみありうるものである。一回はロレタリアの利害と世界武装はロレタリアの利害を、一体化するのには各回武装蜂起を媒介してこのみ實現化するのであ

又、この他党派、権力との最大限、不協の緊張關係を維持されるまで、組織性、規律性を養成され、蜂起をなすこの組織を形成されるのである。ミニタラ、ウ

また、前段階武装蜂起は世界革命戦争に向けずの党派斗争は、その称は一般性以上のものと強烈な党派斗争として展開されるのである。何故なら、前段階武装蜂起は世界革命戦争に貫徹されるから、個別なロレタリア人民の利害は勿論の事、一回はロレタリア人民の利害とは、全く一致したものであるから、世界武装はロレタリアの利害に立脚してのみありうるものである。一回はロレタリアの利害と世界武装はロレタリアの利害を、一体化するのには各回武装蜂起を媒介してこのみ實現化するのであ

る。

又、大い變なるもの、過渡期世界に於ける前段階武装蜂起の客観的条件は、階級危機として形成されるもの戦争は、一口の問題は世界的解決の問題として煮つまつていくという事は、他ならぬ戦争―権力をめぐつてマルとマルの長期の攻防（それ故、それはナショナリズム徹底化しての解決）ハナチス、止（一）徹底的にインターナショナルになることによって、ロレタリア人民、諸階級、各々の結合をはかるが、何れかの道でないものである。そこで徹底してインターナショナルになるもの戦争は、過渡期世界に於ける一口性、個性性、過渡性を止揚し、第一の世界はロレタリア―ト―世界社会主義―世界共産主義を射止に世界党に当面は体系化されるのである。

それは「トーン」の如く、ロシアとロレタリア人民の利害に立脚した「蜂起の党」とは全く異質なものである。「世界革命戦争―世界社会主義」の党としてあるもの戦争である。それ故、我々、前段階武装蜂起を主張するとき、それな日本階級斗争の歴史的、実践的利

と出で相手にした党派斗争に於いての〇〇余名の革命的同志を知ったといつても、この点たる總結はしねばならない。

「蜂起の機は、党の武装は世界党―口頭根拠地―蜂起の軍隊―口頭地下組織の過程としてあり

味方陣営に、加担分子、日和見主義者を抱えていて、決して蜂起はとるべきはとるべきでない。百名の加担分子を果

めるもの、一名の革命的同志の力なきにばと良いのである。

8

だが、前段階武装蜂起は世界革命戦争に向けずの党派斗争は、その称は一般性以上のものと強烈な党派斗争として展開されるのである。何故なら、前段階武装蜂起は世界革命戦争に貫徹されるから、個別なロレタリア人民の利害は勿論の事、一回はロレタリア人民の利害とは、全く一致したものであるから、世界武装はロレタリアの利害に立脚してのみありうるものである。一回はロレタリアの利害と世界武装はロレタリアの利害を、一体化するのには各回武装蜂起を媒介してこのみ實現化するのであ

この戦争の下に、日本とロレタリア人民が、我々、軍派の下に統合されねばならないのである。蜂起に向はく我々の下への征服を要求するのである。この過程を通じてのみ日本とロレタリア人民への利害と党の利害の分離が蜂起を以て止揚されていくのである。

そこで、これは、現実的にまず党派斗争―党派解体斗争に大衆を動員し、大衆の末端まで党派斗争―党派解体

このものをそのものとして説理化させている、最も精進した使派である。

このことゝカオニ「マント連合派を融体させねばなら
ない」との「マント連合派と我々」の位置であり、カニ
は、昨夏ワロをもつて顕在化させた党内斗争―党派斗
争の決着々、11月「段階武装蜂起」の我々の敗北をもつ
て引止されてゐることを、現在、最終的決着段階に突
入したといふことであり、カニは、党内斗争―党派斗
争の性格は、中史稚力斗争を放棄するつとにゐつて、
何の統一性ももたなくなつた「マント連合派々」、政治技
術的にのみ、統一した組織を維持し之をくなり、それ
々、我々赤軍派への党派斗争として緊張関係を創出して

二月以降の彼等の統一の危殆を政治技術的に乗り切
らうとするところには端を発したのであり、ヤ直は、そ
れは、ワロ以降荒々しくなつたヌント連合派々、斗
争の喧騒物として立ち現れ出るそのノミにまつて圧き
抜く勢力に転落したことに意味し、ヤ五に、だつた、
同大を革命戦線（準）の拠点への一環としてあるト関

別棟痛なくに反るるなら「一般学生」は學館に居れないのである。

はくはうのである。これらの争を軸にして、學館から赤軍派の追ひ出し策々、諸々の反なる形成されてくるであらう。

このことは、まさしく蜂起に向けて、兵力と春軍派との斗争——戦争を具體的に展開されていることを意味するのであり、同大學生にとつて、本んの主観とは別に、それに差込まれざるをえないのであり、兵力——

党との斗争に戦争へ、何れ方の立場を向けられていくの
 である。権力一党の斗争に戦争が、シ烈に、公然であ
 ればある程、大家の存在形式に直接的に及なわつてく
 るのであり大家を規制するのであり、このことを媒介
 にしてのみ、蜂起への宣伝一組織の条件も存在するの
 である。(蜂起へ向けた党の利害と人民の利害の止揚
 の道である。)(

それ故に我々の同大學館を公然と占拠し、根拠地にして公然と蜂起への活動を行ねねばならぬのみならず、更に、公然たる活動の領域を広げていかなねばならぬ。

自らをかくすことによって、自づから耐えていくのである。

我々の（この中で、最大限、慎重をなければならぬ）のあり、同時に大胆でなければならぬのである。大衆なら、全く分離した地獄からの蜂起というのは、何と大衆から見えなくない、隠れてしまつことではないのである。我々の内部からの自然発生的なことで、出てくる非合法主義こそ、克服されていかねばならぬ。

勿論、この宣伝、組織が公然となされねばならぬ。程に、これと比例して、四野地下組織が、全く能力大衆に見えたり地獄を子雲に維持、拡大されていかねばならぬ。へでさるだけ、非合法に際し衆、地下に潜伏しつつ展開されねばならぬ。

この両者を統合してはならない。非合法主義はゲリラテロルと露散への合法ボリへの逆々、何れかに押配していくのである。

オ二に、前段蜂起は武装闘争への主体的準備坂きの蜂起は誤りである。その主体的準備の条件は、非武装闘争と根拠地と蜂起の軍隊と四野地下組織である。オ三に、我々は、今秋を目標に、その準備を全て完了させる用意がある。同時に、我々は秋にその目標を遂行するもの、10、21という日本階級斗争の歴史的、実践的経験を一四一五東を体现せしめる時期として形成してしまつたり、その林に基つまつていくからである。オ六に、六月決戦云々は誤りである。何処なら、①ビン、ゲバの量的拡大をはかつても勝利しないことは、昨秋で明らかであり、更なる量的打撃を受ける一三二が確実であるからである。

②六月決戦と云ふ根拠は、我々は、安保の自動延長四を控えているからであるが、そのことは、現在の大衆の自然発生的な安保斗争という度にかゝって、この勘定をしない一三二と意味し、

③安保斗争としての決戦であるから、その斗争は、量的的に政治的斗争の次元に、六月決戦を云つ

4 今秋蜂起ー六月平和デモ

オ一に、現代は蜂起の時代である。過渡期や東に於ける階級危機が煮つまり、戦争ー権力をめぐつて、ヌルとヌルの長期の攻防が開始されている。

オ二に、六〇年代後半、各口前段の武装蜂起の無自覚的敗北は、各口前段主又諸口の平和的發展ー平和共存ー協調の時代として、中央権力の下に諸階級を統合しつつ、侵略ー抑圧ー反革命戦争の全面的開始を成就せしめつつある。

オ三に、二の下に、これまでも戦争的であつた諸階級も、安保斗争の終、次の危機の時代での蜂起と待機論に立ち、当面は、組織拡大に専念しようとしている。（ML米が特徴的であり、マント連合派はそれに論理を与えている。）帝四主又侵略戦争を内訌にへ中核米に「朝鮮戦争を内取し」等は、全て侵略ー抑圧ー反革命戦争待ちである。敗北への道である。

ている要求に討じこめられるのであり、④を以て、そのビン、ゲバ斗争は、中途半端に展開されるのである。

オ七に、現代の、未だ持続しつつある大衆の自然発生的な、これまどななつた程、各政治社会の参加に見えつる林に、大衆は、根底的次元での要求との結合を要求しているのであり、蜂起ー武装革命戦争ー武装社会主義を大胆に提起し、その下に統合をなす責としてあるのである。

オ八に、その故、我々は、六月決戦、ビンゲバ斗争と云ふ中核半端な斗争を維持し、秘蜂起に向けて、我々に促すこと、人民を統合すること、そして自体的形態としての六月平和デモを今から組織しなければならぬ。

オ九に、全このヌルヌリア人民、とりわけ、全米斗争部ー安保斗争を弄つてきた、革命的同志は自らを蜂起の軍隊へ、乃至は革命戦線に結集しなければならぬ。

党斗争の位置

み、この同一性を百している。この全世界的な限界性に対する回答こそ、我々の矢張り斗争の終極であつた。

ベトナム革命戦争は、ゲリラ戦かう正面戦リテト攻勢に入るや否や新たな行き詰りをみせ始め、内部に二つの傾向を生み出した。正面戦の維持、拡大を主張する部分である。この正面戦の維持、拡大を可能にする要素こそ革命の正規軍と世界的な軍事に他ならない。このベトナム革命戦争が北ベトナムを根拠地としつつも、東南アジア

了革命戦線へ、同一の赤軍へ結合し得ない限界性、之を
正面戦を維持しきれない限界である。
一方、フランスにおいても、既にジャール平原奪還斗争
として正面戦―正規戦の領域に突入した。このジャール
平原奪還斗争の深化から、权力中枢への進撃はベトナム
と同様の問題を不可避に提起するであらう。

アルジェラン・ブラジル・中南米の斗いもそのゲリラ
戦術がその限界性を提起し、再編を開始している。それ
は、オリジアに革命センターを作ろうとし、キューバそ
のものを、革命センターにしきれなかつた事に対するキ

争を巨大に呼び起こし、世界的軍事と一時的軍事への巨大な分裂が、階級斗争の最先端を任う部分によつて形成されているのである。世界赤軍の實を有する世界党の新たなヘゲモニーを主体としつつ、蜂起—世界革命戦争を永續化するのな、それとも、ソビエト運動主義—人民戦争論の地平に後退するのなという、この分裂が、全世界に巻きおこされているのである。

に巻きおこされてゐるのである。

先秋斗争が、権力斗争—世東革命戦争の領域への接近であつたとするならば、この課程こそ、明確に、この世

界的分裂の傾向を、日本に於いても形成するのは必然であつた。將しく、ロレタリートの斗いが再び権力斗争の地平を切り拓かんとする時、一回的軍事―世界的な一回的戦斗陣型を主張する部分と、世界的軍事―世界的なロレタリートの戦斗陣型を主張する部分は、決定的に対決せざるを得ないのであり、それは不可避であつた。しかし、この兩者の傾向の斗争は、自覚する、しないに依りわらず、世界的な分裂斗争の内容を有するので

あり、遂にこの分派斗争の課程こそが、新たな世界赤軍を有する世界共産党のヘゲモニーを形成する課程として存在しなければならぬ。

ブントが、旧来の戦斗的大衆運動―口陣型に観念の世界の領域を接ぎ不し、ローザバリの中間主義的統一戦線を主張するその内容こそが、観念における分裂―多額のゲルグへの分裂―無政府主義と裏返しのスターリン主義による統制を不可避にし、現実には、転じた一口主、革命主義に陥ることを得ないのである。

従って、我々のブントとの党派斗争はその課程に、新たな世界共産党のヘゲモニーの形成と、世界赤軍―世界革命戦線の世界的プロレタリアの戦略陣型を作り出すことを内容とする党形成なのである。

将しく、プロレタリアートの世界的組織課程こそ世界革命戦略であり、この結合こそ、プロレタリアートを唯一、止揚できるとしたう、従って、それが帝国主義奴才軍隊を打倒する唯一のヘゲモニーであるとし

たら、そして世界的な階級斗争の成熟そのものを要求しているとしたら、我々はそれに確答をねばならないだろう。

我々が、この世界的なプロレタリアの戦斗陣型として世界赤軍―世界革命戦線の戦斗陣型を世界的なヘゲモニーとして三ブロック全領域に形成するものとして、かつその内容を日本に於いて形成しようとする時、我々は旧来の一口的戦斗陣型―戦斗的大衆運動を不可避に対決するし、これこそ、六派―八派との熾烈な階級斗争であり、ブントが六〇年以来最も前衛的存在であったが故に、我々とブントとの党派斗争はその先端を占めるのであり、彼らは旧来の運動のリーダー者として立ち現われるのである。

従って我々はこのブントとの党派斗争を通じて、これを全人民化するることによって、この党派斗争の位置を明かにしつつ、軍の形成と革命戦線の全領域における形成を實現していかなければならぬ。

××に於いては当初行動隊として形成された部分か、

この党派斗争と組織的訓練によって軍と革命戦線の結合が内実化されこの軍へ飛躍していった。かつこの政治集会と結合してこの内に於ける我々のヘゲモニーを確立していった。このに於いても同質の方向を獲得した。(ブントの政治内容の批判は赤軍NO8参照)従って、このブントとの党派斗争こそ、我々が世界へ飛躍する内実を獲得する課程であり、我々の全人民へのヘゲモニー形成の軸線なのである。ここに結果として我々は実体的にも彼らを粉碎することになるのである、既に彼らとの直接的決着は半ばついた。

ヘー／／16 集木公ム

1/16、18の課程の成功とその阻害をはっきりさせることから確認しよう。

1/16 集会の成功は秋の終結を媒介にして我々の再登場であった。そして、その終結を媒介に、×××の部分を中心に組織形成をしたのか、この直後の課程である。しかし、1/16、18はこれ以上の何も示さ

なかつたし、現在の我々の到達した地平は次の二点を明確に要求され始めていることを確認しなければならぬ。一、世界プロレタリアートの戦略陣型に向けての運動―組織論とその実体化
二、革命戦争論の構築―蜂起の陣型の構築とこれへ向けての目的意識的追求

以上の二点である。この二点とは何であるのか。

①六〇年代の戦斗は、暴力斗争とは権力を倒し得ないことを前提とした斗争であった。しかし、現在要求され、我々自身完遂しようとしている斗いは将しく権力を打倒する斗いであり、現実には打倒する為の斗いである。としたら旧来の政治に於ける団い込みと権力の直接対決で自らを維持していくという构造は、維持されなくなっていくのである。従って、中核やMLが如何に頑張ろうと

もその延長上には決して展望が存在しないことを全人民の前に明らかにしている。とすると、現在、我々の提起している新たなプロレタリアートの戦斗陣型とは、旧

果と異なる新たな党と大衆の結合の形式—方法なのである。従つてそれは現実に関力を打仆しつゝの實と、プロレタリアートの未來に普遍性を體現しつゝの實体の組織化とその具體的運動を媒介にしない限り、プロレタリアートは、最早、斗いに立ち上かるうとはしなくなつてゐるのである。世界赤軍がこの巨大な世界革命戦争を領導し抜く主体であり、かつ対自然対人間の關係こそ未來に普遍に世界性の表現であることは確認した。従つて、我々は軍、班でなければ大衆と結合できないことを明確に確認しなければならない。

プロレタリア人民の軍隊—中央軍、地方軍、ゲリラ軍を建設せよ、革命戦線を建設せよ

前段階蜂起に向け、防衛的戦争を勝利的に斗い抜き、対峙段階に押し上げるには、いうまでもなく、プロレタリア人民の軍隊がなくてはならない。

政治的勢力一般の強化では、現在の階級斗争の転換を乗り切れないことは何度も確認された。政治勢力が

ら武装勢力は排除されねばならぬ。武装勢力は政治勢力の延長であり、實的に相対的に独立である。

我々はこの武装勢力を半中央軍—半地方軍—半ゲリラ軍として創出し、これを内包した政治勢力の實と形態を革命戦線準備会として獲得しなければならない。

武装宣伝隊は全口を成場とし、行動性を最大限持ち、中央権力武装占拠解体の前線を荷ねねばならぬ。この武装宣伝隊は最も意識の発達したプロレタリア、学生、人民によつて組織されねばならぬ。

以下次号に続く